



## 年間第 19 主日 (ヨハネ 6:41-51)

信仰を成長させてもらう態度が備わっているか

「ユダヤ人たちは、イエスが『わたしは天から降って来たパンである』と言われたので、イエスのことをつぶやき始め(た)」(6・41)。年間第 19 主日 B 年の朗読から学びを得るために、群衆の「つぶやく」態度に注目したいと思います。

今年は 8 月 9 日長崎原爆の日が日曜日と重なりました。聞いた話では浦上教会の信徒は投下された原爆によって 12000 人のうち 8000 人が一瞬にして命を落としたと言われていています。

大きさに圧倒される浦上天主堂ですが、犠牲となった命が積み重なってあの壮麗な聖堂を成り立たせていると考えると、聖堂内に入った時祈る気持ちになるのは当然だといつも思います。報道各社も一日「祈る長崎」を報道すると思いますが、わたしたちも信仰を同じくする人々のため、またすべての犠牲者のため、一日祈りをささげたいと思います。

福音朗読に戻りましょう。あえてわたしは「群衆がつぶやく態度について」と前置きしました。皆さんの中には「ユダヤ人たちのつぶやく態度についてではないのか」と思われた方もいるでしょう。選ばれたヨハネ福音書第 6 章の前後関係から考える必要がありますが、第 6 章の舞台はガリラヤです。

ヨハネ福音書に登場するユダヤ人は、単に人種を表しているのではありません。ヨハネの言うユダヤ人は、エルサレムに住んでいて、しかもイエスに敵対する人々のことです。すると、ガリラヤでイエスを取り囲む群衆はユダヤ人と同一ではないはずですが、この表現で群衆がイエスに敵対する人々に変わってしまったことが暗示されています。

たとえば家族を扱ったドラマで「親でもなければ子でもない。出て行け」とか言って親子喧嘩する場面を見たりします。実の親子であっても度を過ぎた親不幸などで敵対的な行動を取れば、親が態度を豹変することも起こりえます。ガリラヤでイエスを取り巻く群衆は、ある時点でイエスに見切りを付け、敵対する人々、すなわちヨハネ福音記者の言う「ユダヤ人」に豹変したのです。

ではガリラヤの群衆は、いつ「ユダヤ人」に豹変したのでしょうか。彼らがイエスに対してつぶやき始めた時点で、イエスに敵対する人々に変わったのです。ただし、聖書の「つぶやく」は日本語の「つぶやく」と少し意味合いが違うことを覚えておきましょう。

日本語の「つぶやく」は「小さな声でひとりごとを言う」の意味で、最初から自分の要求が受け入れてもらえずにぶつぶつ言う態度を含むわけではありません。

これに対して聖書の「つぶやく」には、最初から「要求や主張が満たされていない」ということが含まれているそうです。ですから聖書における「つぶやく」は要求が満たされないから離れて行ってしまおう、要求が満たされない相手に敵意を持つ、そういうことが含まれるのです。

イエスに対して「つぶやく」のは、イエスについて行くかどうかをこれから考える人ではなく、もはやイエスにはついて行かない、イエスを敵とみなす、そういう人々だということになります。当然の帰結として、イエスについて行かない人、イエスを敵とみなす人々にイエスへの信仰は育たず、自分で救いの扉を閉ざすことになります。

わたしは、信仰を成長させてもらえる人というのはそれにふさわしいタイプがあると思います。イエスへの信仰を持ち始めるきっかけはわたしたちの中にあるわけですが、イエスへの信仰を育ててくれるのはあくまでもイエスです。イエスはすべての人にご自身への信仰が成長するように導いてくださいますが、わたしたちが、イエスの導きについて行ける状態になれば、いくらイエスからの導きがあっても信仰が成長することはないと思うのです。

イエスと出会った人が取る態度は3つに分けられると思います。一つはイエスの導きに全く耳を貸そうとしない人です。自分の要求がかなえてもらえるかどうかだけに興味があり、要求がかなわなければイエスの導きに聞き従おうとする気持ちなどない人です。

次に、イエスの導きを実現不可能なことと思い、イエスから去っていく人々です。イエスの導きを魅力的だと思い、いったんは聞こうとしますが、自分にはとても実行できないと決めつけてしまい、心を閉ざし、去っていく人々です。

最後に残るのは、「主よ、ごもっともです」と答えることのできる人です。わたしたちはイエスの導きに戸惑うことが多く、「なぜ？」とか「でも・・・」とかつい口にしてしまいます。

けれども、そうした思いに自分自身がんじがらめになることなく、ひとりよがりの考えを横に置き、「主よ、ごもっともです」と答える人は、イエスへの信仰が育って行くのだと思います。信仰は、人間の思いを超えたところにある導きを受け入れていく歩みです。なぜあの人ではなくわたしが責任を問われているのか、なぜ今大切な人を失わなければならないのか。人生の中で分からないことは数え切れないでしょう。

そんな中でもイエスは、わたしの信仰を育てようと常に導いておられるのです。「主よ、ごもっともです」と、自分の判断を取り下げてイエスの導きに全面的に心を開く。そうしてわたしたちはより高い信仰の高みにたどり着けるのです。

イエスはわたしたちに問いを投げかけます。信仰の道を歩きたいのですか？では一切耳を貸さない人にならず、わたしの声に失望せず、心を開き、耳を傾ける人になりなさい。そうすれば、わたしがあなたの信仰を増し加え、育てます。イエスはそう呼びかけているのです。

福見教会で、大人の方が洗礼をお受けになります。大きな希望を持って、洗礼式に臨まれます。どうか皆さん、これから洗礼を受けるこの人が水と霊によって新しく生まれ、イエスの招きに「主よ、ごもっともです」と答えていけるように、共に祈りで支えてください。これから洗礼式に移ります。